

## 第二章 薬のお金に溺れる医療界

### その③ 行き過ぎた製薬会社のプロモーション

上野 秀樹

私は平成四（一九九二）年に大学を卒業し、医師になりました。

大学病院医局勤務の研修医の頃、先輩から製薬会社のMR（medical representative）＝医薬情報担当者）との

関係の持ち方を教わりました。「（酒食のもてなしを受ける）薬の説明会では、かならず質問することが礼儀」というような内容であったと記憶しています。

医師になったのがうれしかった私は、薬や製薬会社の名前入りのボールペンを使っていることが「特権階級である医師」であることを示しているように感じて、仕事とは関係ない場面でも喜んで使っていました。

また、出世して大学の教官等になると、専属のMRがついたりすることを知り、「偉くなると製薬会社にいろいろ便宜を図ってもらえるんだ」とうらや

ましく思ったことを記憶しています。

学会では当然のごとくに製薬会社後援のランチョンセミナーに参加し、提供された「高級弁当」を食べていました。

製薬会社は新薬を発売すると、大きなホテルを借り切り、交通費や宿泊費、ルームサービス代まで含めてすべての費用を会社が負担して、全国から関連する診療科の医師を多数集めてプロモーション活動を行います。

そして、そこに〇〇大学医学部教授などの肩書きの医師が登場して、新薬の販売促進目的の講演を行うのです。その催しに何人の医師を集めることが出来たかがMRの評価になっている様子であることも含めて、私は何も疑問に思うことはありませんでした。

しかし、数年前にある出来事があったから、私は製薬会社が行き過ぎたプ

ロモーション活動をしていると疑問に思うようになりました。そして、それが医療のあり方をゆがめ、結果として医療費、社会保障費の高騰を招いている、さらには私たちの国家財政を危機に陥れている一つの大きな要因になっていると考えるようになりました。

その出来事とは、品川のホテルでの製薬会社の催しに参加したときの話です。数百人を集めた新薬のプロモーションが終わって帰ることになりました。私は東京駅までタクシーに乗り、その後電車で千葉県の自宅に戻るつもりでした。ホテルの玄関でタクシーに乗って、「東京駅まで」と運転手に告げたところ、しばらく走った後で運転手が振り返って尋ねてくるのです。「先生、どちらまでお帰りですか？」と。

何でそんなことを聞くのかと思いましたが、私は千葉県内であることを告げました。すると、運転手さんは言いました。「私は、今日この製薬会社の会合があることを知って、何時間も前か

第2章 薬のお金に溺れる医療界

らずつとホテルの近辺で待機していたんです。それで東京駅まででは、とてもじゃないけど浮かばれません。」「この製薬会社のタクシーチケットは、メーター制限なしなんです。先生のご自宅までぜひ送らせてください」と。

あまり何度も何度もしつこく頼んでくるので、私も根負けして「いいよ」と言ってしまうました三万円以上の料金です。もちろん私は一円も負担していません。その後、都内で他のタクシーに乗車したとき、運転手にこの話をしたら、苦笑していました。私は、こうした出来事がそれほど珍しくないことなのかも知れないと感じたのです。

こんなこともあつて、私たち医師と製薬会社との関係はおかしいのではないかと思ひ始めました。医師は、製薬会社のMRから下にも置かぬもてなしを受け、自分が偉くなつてしまったかのような、何らかの特権階級であるかのような錯覚に陥つていきます。こうした製薬会社の営業活動のあり方が、

医師の人格形成上の大きな問題となつているのは間違いありません。

製薬会社の「社会貢献活動」が疾病の啓発など、社会づくりに有効であると主張する人がいます。しかし、製薬会社は株式会社です。株主の利益に結びつく活動でなければ、株主代表訴訟を起こされ、経営陣は責任をとらされます。株式会社による純粋な「社会貢献」などあり得ません。利益に結びつく方向で巧妙に行われています。

こうした自称「社会貢献活動」に限らず、講演会、シンポジウムなどの催しを製薬会社と共催することで、医師は製薬会社の製品や活動を批判しにくくなり、本来自由であるべき議論の内容に一定の方向性を与えてしまうことが問題なのです。

製薬会社の行き過ぎたプロモーション活動は、ボールペン一本、レポート用紙一冊から始まります。小さなものから徐々に私たちの感覚を鈍らせ、巧妙に私たちの心を支配していきます。

これに気づいたとき私は、製薬会社からもらったボールペンその他、すべて処分しました。今では、製薬会社の後援のついた会でお話しをすることもすべてお断りしています。

先日、京都で開かれた第二十四回精神科認知症フォーラムで講演する機会を得ました。私は製薬会社の後援を外していただき、ポケットマネーから運営を寄附しようと考えていました。ですが、いつもは三十人くらいの参加者が一〇名となり、交通費・宿泊代、講演料をいただくことが出来ませんでした。運営した方々は、多くの事務作業があつて大変であつたようです。

私は、巧妙に隠された利益相反が最も問題であると考えています。それに関わっている人々には全く自覚がありません。私たちが、巧妙に隠された利益相反を見抜き、社会から排除していくことが大切ではないでしょうか。